

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Outcomes of Extraocular Muscle Surgery for Diplopia or Abnormal Head Posture After Treatment of Brain Disease

(頭蓋内疾患治療後の複視と頭位異常に対する外眼筋手術の治療成績)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 高次神経制御 系

眼科学 (指導教授 五味 文)

氏 名 西口 文

【目的】重症な脳血管障害 (SCVD) と脳腫瘍 (BT) 治療後に発症した、複視と代償性頭位異常に対する外眼筋手術の治療成績について報告する。

【対象と方法】2006年3月から2018年2月に、SCVD群とBT群の治療後の複視と頭位異常に対し当科で外眼筋手術を施行した64例(男性25例,女性39例,平均年齢53.6歳)を対象とした。背景,手術方法,手術回数,手術成績,満足度調査 (NEI-VFQ25日本語版)につぎ比較検討した。

【結果】

背景: SCVD群26例, BT群38例で、発症から外眼筋手術までの期間は、SCVD群 45.8 ± 69.3 か月, BT群 48.0 ± 61.4 か月で、両群に有意差を認めなかった。外眼筋手術時の平均年齢は、SCVD群 58.6 ± 13.7 歳, BT群 50.1 ± 16.6 歳で、BT群で有意に若かった ($p=0.0236$)。複視の原因となる眼球運動障害は、外転神経麻痺が最多でSCVD群26.9%, BT群52.6%, 回旋斜視の合併はSCVD群30.8%, BT群42.1%に認めた。頭位異常はSCVD群64%, BT群57.9%に認めた。

手術方法: 外転神経麻痺に対する筋移動術は32例中17例 (53.1%) に、回旋偏位に対する上下直筋水平移動術は23例中16例 (69.6%) に施行した。平均 19.3 ± 25.6 か月の経過観察期間中、再手術はSCVD群30.8%, BT群26.3%で、平均手術回数はSCVD群 1.3 ± 0.7 回, BT群 1.3 ± 0.5 回で、有意差を認めなかった。

手術成績: 複視消失率は手術単独でSCVD群46.2%, BT群57.9%, プリズム療法併用でそれぞれ80.0%, 85.7%となった。頭位異常の改善はSCVD群81.0%, BT群81.8%であった。術後のNEI-VFQ25は56.3%で回答を得た。11項目中8項目 (近見視力, 遠方視力, 社会的機能, メンタルヘルス, 役割の制限, 依存関係, 色覚, 周辺視野) でBT群はSCVD群より有意にスコアが高かった (それぞれ $p=0.0165$, $p=0.0023$, $p=0.0347$, $p=0.0191$, $p=0.0030$, $p=0.0053$, $p=0.0129$, $p=0.030$)。

【考察】頭蓋内疾患治療後、複視発症から外眼筋手術まで平均で約4年を要していた。複視消失率は両群とも8割を超え治療成績は良好であったが、SCVD群のNEI-VFQ25スコアはBT群よりも有意に低く、SCVDでは突発的な発症, 疾患の受容困難などが関与していると考えられた。

【結論】重症頭蓋内疾患治療後の複視や頭位異常に対する治療成績は、外眼筋手術に加え保存的治療としてのプリズム療法の併用が有効であった。積極的な外眼筋手術とプリズム療法の併用が治療に重要と考えられた。